て、出た！ 超光速エネルギー反応!!

ニッキが、みるみるうちに光に包まれていった時、いっぽう、ドクター・エッグマンは、こう叫んでいました。

「オオ！ み、見ろ見ろ見るがいい、オムレッツ！」

ぷぷぷぷ～～～～！ エッグマンは、うれしさのあまり、ひっしにオナラをこらえています。（それでも、もうすでにモレている）

「なんだなやぁ～？」

『これじゃこれじゃ、この『今世紀最強の科学者』であるわしが作り出したメカ、その名も〈超光速エネルギー見っけたぁ～♥ エッグ〉！」

そう言って「ジャンジャカジャ～ン！」ポケットの中から、光り輝くタマゴを取り出したのです。

「だなや？」

「オムレッツよ！ このエッグが光る時、それは、このわしが長年にわたって求め続けたエネルギー、〈超光速エネルギー〉が近くにあることの証明ぞ。」

「だなだな。」

「ふははは～～～～！ どこじゃどこじゃ？ エッグよ、早くこのわしにエネルギーの発信もとを教えんかい！」

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

●前回のあらすじ

朝の通学路に現れた天才科学者エッグマンとそのメカ、オムレッツ。さらにバクハツメカ〈ボッカン〉の三つ子が生まれて、あたりは大さわぎに。その場から逃げようとしたエミーがスポーツカーにひかれそうになり、あわてて飛び出したニッキ。その全身が光に包まれて…。

ぷぷぷぷ～～～～！
エッグマンは、とうとうこらえきれなくなって、盛大なオナラを連発。
おかげで、やっと晴れてきた黄色の煙が、またまた、まっ黄っ黄ぃ～！になっていきました。
「ひぇ～、こらも～、たまらんわ～～～！」
さすがのオムレッツも逃げ出します。
しかも、今のオムレッツ。ドクターになんかかまってるヒマはありません。

「お待ち～！ お待ち～！」
自分で生み出した三体のメカ〈ボッカン〉を追いかけるのに、汗だく（？）なのです。
その時、ペリペリペリ～～～！
〈超光速エネルギー見つけたぁ～♥エッグ〉のカラにヒビが走り。
そして、パコン！
タマゴが割れて、中からヒヨコが顔を出したのでした。
そしてそして、なんと、そのヒヨコが、

▲エッグマン

「東に三歩、西に十歩、……ほんでもって、そこの消化せんにオシッコをかけたら、ひょいと後ろに振り返れ！」
と、伝説のエネルギーの方向を教えたのです。
「よ～しよしよし！ イーストにスリー・ウォーク……、ほんでもって……。」
エッグマンは、おかしな英語をつぶやきながら、オナラのケムリの中を手探りで進みはじめました。
そして、とうとう、
「消化せんにオシッコをかけて……。」
ジョワ～～～～！
そしてそして、「ひょい！」とエッグの言うとおりに後ろを振り返ったのです。
すると、どうでしょう！
「うわ～～～～！ こ、これは！」
エッグマンは、まばゆいばかりの光に、たちまち目をおおわれていました。
「おっとっと（おかしの名前を言ったのではない！）……。アンビリーバブル！（信じられなぁ～い！）この光は、いったい？」
科学者のエッグマンが、思わずそう叫んでしまったのもムリありません。
その光は、今まで見たこともないほど美しく、またキョーレツだったのです。
そして、さらに驚いたことに、その光の中から、青い影がゆっくりと浮かび上がってきたのでした。

「お、お前は？」

はたして、その青い影は、ハリネズミのかわいい娘、エミーを抱きかかえていました。

そして、エッグマンをちょっとにらむようにして、こう言ったのです。

「オレか？　……オレの名は、光速を超えたニクイやつ、ソニック・ザ・ヘッジホッグってんだ！」

そう言うと、ソニックに抱きかかえられていたエミーが、

「ドッカァ〜ン！　……ス・テ・キ！」

と言って、気をうしなってしまったのでした。

◀エミー

必殺ローリングアタック！

そうです、そうです！

〈ボッカン〉に追いかけられていたエミーは、スポーツカーにはねられそうになった瞬間、危機一髪、このソニック・ザ・ヘッジホッグに救われていたのです。

「キャ〜！　ソニック・ザ・ヘッジホッグだわ！」

だれよりも早く、タニアが叫びました。

すると、もう大騒ぎです。

「うわ〜ん、ソニックのアニキィ〜！　お会いしたかったぜぇ〜！」

チャミーも、ソニックを取り囲もうとするみんなをかき分けるようにして、飛びついていきました。

この時、ニッキの姿がどこにもないっていうことに、だ〜れも気づきません。

それは、〈超光速エネルギー〉を追いかけてきたエッグマンにしても、同じこと。

ただただ、しばらくの間、ボ〜ゼンとソニックを見つめてしまったほどでした。

「ソ、ソニック・ザ・ヘッジホッグだと？　や、やつが、あのエネルギーの持ち主だというのか！」

と、

「ぎゃ〜！　また来たぁ〜〜〜〜！」

その時、パティが叫びました。

ソニック▲

ウンチャウンチャ・・・と、〈ボッカン〉がやって来たのです。

でも、だいじょうぶ。

「ヘン！　オレに任せな！」

ソニックは、そう言って、エミーをそれまでボ〜っと見ていたリトル・ジョンに渡すと、自分のほうから〈ボッカン〉に立ち向かっていきました。

「それぇ〜！　ローリング・アターック！」

体を、ものすごい勢いで回転させて。

〈ボッカン〉を直撃！

「ソニック！　危なぁ〜い！　それ、バクダンなのよ〜！」

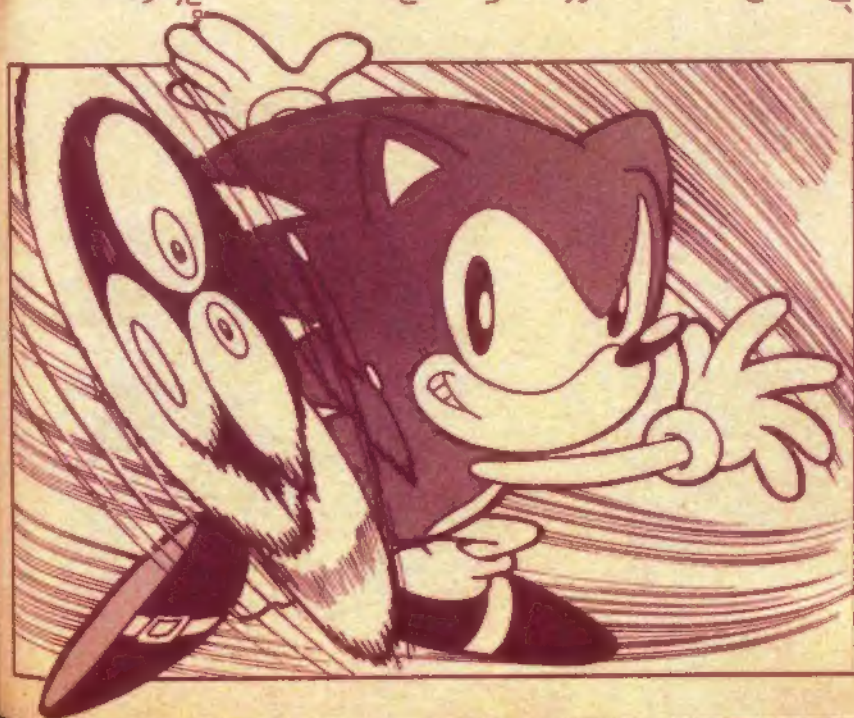
タニアが、叫びます。

しかし、その次の瞬間、とっても信じられないことが起こったのでした。

◀ボッカン

　ソニックは、〈ボッカン〉に体当たりすると見せかけて、そのメカの周りをものすごい速さで回りだしていたのです。
「こ、これは、す、すごいスピードだ！」
　エッグマンが、思わず叫びました。
　そして、ソニックが超光速で回転したために、その中が真空になり、おかげで〈ボッカン〉がふわ〜りと持ち上がっていったのです。
「そ〜りゃ、生んだ本人にお返ししてやるぜえ〜！」
　ソニックは、まるで円盤投げのように、〈ボッカン〉をオムレッツに投げつけました。
　ボッカ〜ン！
「おお、オムレッツ！」
「だなやだなや…ゲッホ！ゲッホ！」
　オムレッツは、〈ボッカン〉をまともに食らって真っ黒コゲです。
「す、す、すばらしい！　まさに、光速を超えたフシギなエネルギー！　これぞ、これぞ、〈超光速エネルギー〉じゃー」
　と、興奮したエッグマン。
「よ〜し、こうなったら、あのエネルギーがどれほどすごいか、ためしてやる。それ〜、オムレッツよ。生めや増やせや〜〜〜！」
　ペシペシペシ〜〜〜！
　さかんにオムレッツの頭をたたきました。
「だっは、なやぁ〜〜〜！」
　頭をたたかれたのでは、オムレッツも黒コゲでゲホゲホやってるヒマ(?)はありません。
　ぶるぶるぶる〜〜〜！　と全身を震わせると、
「オメデタ〜〜〜！　オメデタ〜〜〜！」
と叫んで、次つぎに新しい〈ボッカン〉を生み始めたのでした。

†

　さぁ、それからはもうタイヘンでした。
　オムレッツは、〈ボッカン〉だけでなく、カミツキ魔の〈バイトン〉軍団。
　それに、なんでもたちまち凍らせてしまう〈ブリザードマン〉、なんていうメカまで。
　次つぎに生み出しては、ソニックに攻撃をしかけたのです。
　でも、そのたんびに、
「ローリング・アタ〜ック！」
　ソニックの必殺ワザが、サクレツ！
　またたくまに、やっつけてしまうのでした。
「そりゃそりゃ〜、なにをしておるオムレッツ！　もっと強いメカを生み出さんかい！」
　ペシペシ！

　エッグマンが、オムレッツの頭をたたきます。
「ひぇ〜〜〜！　カンベンだなや、オッサン！」
「こらぁ〜！　また、ワシのことオッサンと呼んだな〜？　ドクターと呼べドクターとお！」
と、まぁ〜たこのやり取りのくり返しです。
　そして、しまいには、フラフラになったオムレッツが、
「これで、オシマイオシマイ〜〜〜！」

と、「オシマイ」と書いてある、ちびっちゃいタマゴを生み落とすと、コテンとぶっ倒れてしまったのでした。

「い、いかん。〈オシマイ・エッグ〉が出てしまったぞい！ メカを生ませ過ぎたんだ！」

さすがのドクターも、冷やアセが、タラ～っとたれたのでした。

チューしてもいいせっ！

「ありがとう。ソニック・ザ・ヘッジホッグ！」

ソニックが、ものすごい早さでメカ軍団をやっつけてしまうと、気を取り戻したエミーが言いました。

「へへっ、なぁ～に、大したことじゃねぇ～さ！」

ソニックは、ちょっとテレたようにみだれた前がみをかきあげてみせると、

「ま、お礼にチューしてくれてもいいけど！」

と言って、自分のホッペタを指さしました。

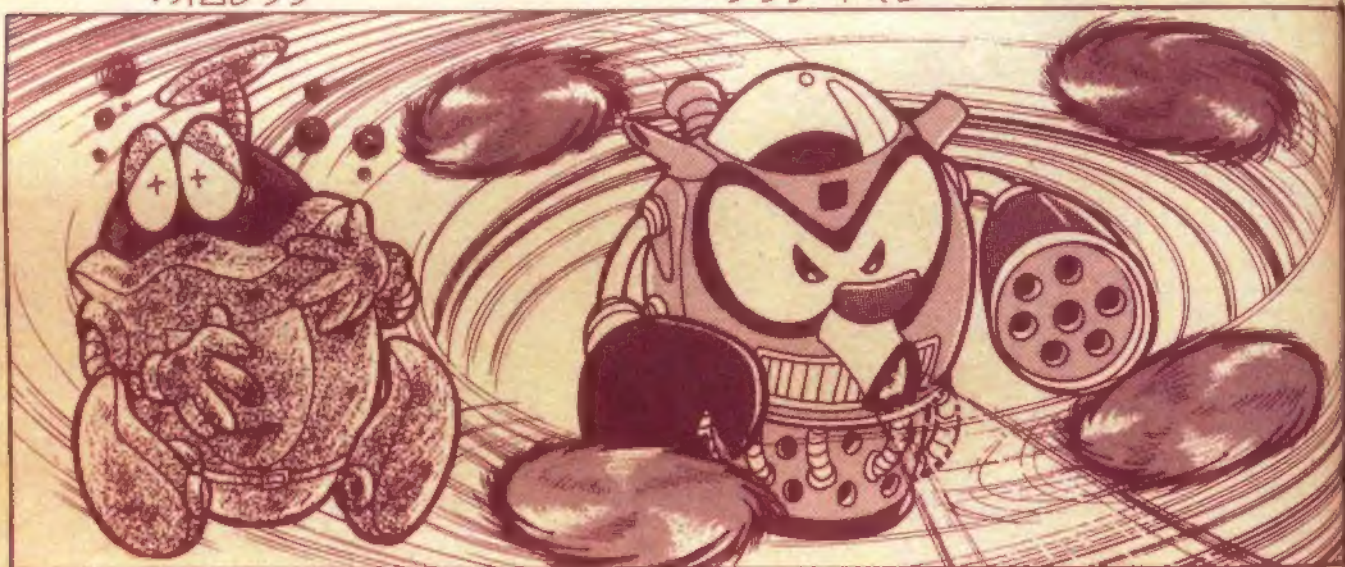
「アキャ～ン！ ソニックたらぁ！」

エミーが顔をポッと赤らめました。

これにはもう、みんな大騒ぎ。

女の子たちは、エミーを「キャッキャッ！」と冷やかすし。

男の子たちは、うらやましさ半分、ソニックへのソンケー半分で、た～だただ「オオ！」とかいう声をあげるばかりです。

▼ブリザードマン　▼オムレッツ

▼タニア

すると、

「よ～し、そんじゃ、あたしがエミーさんの代わりにチューしてあげる！」

なんて言って、タニアが、ぶちゅう……ってクチビルを突き出して、ソニックに飛びついていきました。

「お、おいおいおい……、ジョ、ジョーダンだってば！ や、やめろ！ オ、オレは、ガキンチョには、キョーミねぇ～んだって！」

ソニックはあわてて逃げ出しました。

「あ～ん、ガキンチョとは、なによぉ～！」

タニアがむっとなって追いかけます。

「ひぇ～、なんてガキなんだぁ～～！」

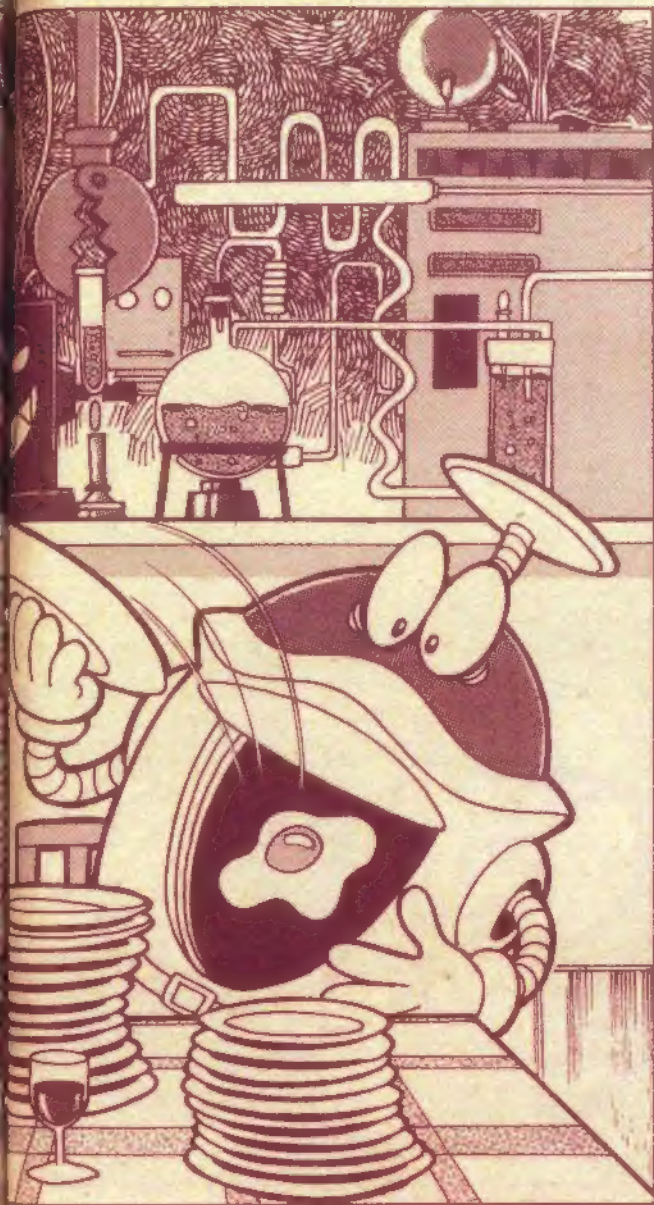
さすがの光速少年も、これには大弱り！

悲鳴をあげて逃げ回ります。

「うっふふ……、ソニックって。ちょっと、ビックリすることへーキで言う人だけど。ケッコウ、おもしろい人なのね。」

と、エミー。

「や～だ、エミーったら」

「え？ な、なに？」

モニカが、なぜか心配そうにエミーのオデコに手を当てています。

「熱があるみたい。顔が、まっ赤。救急車呼んだほうがいいかも。」

「ええ?」

するとパティが吹き出しました。

「やだも〜、あいかわらずクライんだから!　熱は熱でも、恋しちゃったかしらぁ?っていう熱のこと!　ね、エ・ミー?」

「キャ〜ッ!　やだやだやだぁ〜!　パティったら!」

とその時、タニアに追われたソニックが、消化せんにゴン!としょう突。

そのため、ブシュ〜〜〜!　勢いよく水がふきだしました。

「キャ〜!　お、お水ぅ〜〜〜!」

オナラのケムリの後、今度は水の噴射です。

エミーたちは、ぱっと逃げ出しました。

そしてそして!

フシギィ?　……なことに。

水の勢いがやっとこ収まると、ソニックの姿がどこにも見えなくなっていたのです。

「ア、アニキぃ?　どこに行ったんだい?」

チャミーが、ブンブン飛び回って、ひっしにさがします。

でももうほんのちょっと前、大活躍を見せてくれたスーパースターの姿を見つけることはできません。

ところが、そのかわりに、

「ギャン!　ど、どうしたのよ?　お兄ちゃん!」

タニアがずぶぬれになって倒れているニッキを見つけたのです。

「あ、ああ……タニア!」

「ああ、タニアじゃないわよ、お兄ちゃん。いったい、こんなトコで、なぁ〜にねっころがってるのよぉ〜!」

「そうよ、もう夕〜イヘンだったんだから。」

エミーを引っ張るようにしてパティとモニカがかけ寄ってきます。

「エミーがね。もうちょっとのところで、おヨメさんにされるとこだったんだから。」

「ええ?」

「ちがうでしょ、ちがうでしょ、モニカ!」

「チューしてごらん、って言っただけじゃないの、ソニックはぁ!」

「ソニック?」

ニッキは、目をパチクリさせました。

「そ、そうか。……また、ボクの知らないうちに、ソニックが現れたのかぁ!」

ニッキは、とってもザンネンそうに、そうつぶやきました。

†

そして、その夜。

ドクター・エッグマンの地下ヒミツ研究所では、三百三十七個の目玉焼きが、ひそかに作られていた……。

いや、べつにひそかに作られていたわけではないんですが。

ソニック・ザ・ヘッジホッグ

The Adventures of SONIC the Hedgehog

　とにかくは、いくつものいくつもの目玉焼きが作られていたのです。
　なぜか？
「ほり、できたぞ、できたぞ、オムレッツ／お食べ。」
「だはは……なや。」
　そうですそうです／
　その目玉焼きとは、オムレッツのガソリンの役割をするものだったのです。
「今世紀最強」とも「史上サイテー」とも言われている科学者、ドクターエッグマン。

　タマゴの成分の中から、ガソリンに代わるパワーをあみだしていたのです／（ホントかねえ？）
「ムシャムシャ…だはなや、ムシャムシャ…だはなや…。」
　目玉焼きをムシャムシャ食べる、オムレッツ。
　すると、ぐんぐんもとのパワーを取りもどしていきました。
「よ〜し、それでよいぞオムレッツ／　早く元気になって、このワシの手助けをするのだ。」
「だなや…ムシャ。」

ますますアヤシイこのコンビ。どうなることやら…？

「ワシが、長年追い求めてきた超エネルギーは、たしかに存在した！」
　シュピ／
　エッグマンは、もうすでに勝利したようにVサインを作り。
　ブキミな感じに笑うと、
「ソニック・ザ・ヘッジホッグ／　お前をつかまえて、そのエネルギーのナゾを解き、このワシが、全世界の王となる日は近いぞい！」
　こう言って、さらに、
「コケコッコ〜ッ！」
　なぜか、ニワトリのように鳴き叫んだのでした。

つづく